

長崎大学改革

～目に見える「変化」を求めて～



福地 茂雄

アサヒビール株式会社
代表取締役会長

Fukuchi Shigeo

対談



齋藤 寛

長崎大学長

Saito Hiroshi

今年4月で法人化3年目を迎える長崎大学。本格的な大学改革に取り組む長崎大学について、齋藤学長と本学OBでもあり、本学の経営協議会委員・学長選考会議議長であるアサヒビール(株)福地会長との対談が行われました。長崎大学のトップとビール業界のトップが、今後期待される長崎大学への熱い思いや、長崎大学像をそれぞれに語り合うという、白熱した内容となった今回の対談。

お二人が思い描く未来の長崎大学はいったいどのような姿をしているのでしょうか。



■「変化」は目に見えてこそ

原田 平成16年度から法人化ということで、大学もこれまでとは大きく変わりました。大学がどのように変わって、どんなところを目指しているのかについて、齋藤学長からお話いただければと思います。

学長 法人化になって長崎大学がどのように変わったかについては福地会長がよくご存じと思うのですが、平成16年度の1年間の長崎大学の実績を文部科学省に提出しました。その結果、大筋ではこれまでの長崎大学の取り組みはよろしいと言われています。しかしながら、私の考えているところでは、その改革はまだ十分とは言えません。長崎大学の教職員が、法人化になったということで、大学を大いに変えていかなければ社会の皆さんの支持も得られない、そういう事についての意識は統一してはいますが、各学部はどのような方向で変わっていくべきなのかとか、トップは何を考えているのかについてはまだまだ情報が不十分で、浸透していないというのが実情です。

福地 何にしてもそうですが、「変化」というものは目に見えないといけませんね。

今の少子化・高齢化という世の中で、大学は学生達にまず入学志望校として選ばれる訳です。学生達を送り出すときは社会・企業から卒業校ということで選ばれる。しかも大学の数が多いため、その中で長崎大学がどのように生き残っていくか、長崎大学

の強みは何か、ということについて考えていかなければいけないと思います。

まず、強みということですが、やはりアジアに近い・南を向いているということではないでしょうか。しかし、それがわかっている形になって現れていなければいけないのです。教育と研究の面に現れてくることが大切ですね。例えば、留学生が増えてきたとか、具体的にアジア関係の講座が増えてきたとか。

■アジアへの視線

学長 そうですね。医学部は現在ベトナムとケニアに感染症の研究のための拠点を作っています。熱帯医学に関するCOE(※)などももう3年になります。また平成12年に感染症の大学院を作りました。特色のある大学院ということで、感染症の大学院と熱帯医学研究所と一緒に、感染症の研究に特化していったわけです。法人化になって重点的な財政支援が可能になりました。そこで私はまず、**原爆後遺症研究と感染症**



研究の次として東アジアを中心とする学問を推進しようと思っています。福地会長は、九州に一つしかない、あるいは二つしかない環境科学部や水産学部が集まって何か特色あるプロジェクトを打ち出せば、それが長崎大学ならではの特長になると以前から経営協議会の場でおっしゃっていました。アジアに一番近い長崎大学という話が先程ありましたが、それで水産学部を中心に環東シナ海海洋環境資源研究センターを作つて、そこに環境科学部、経済学部、工学部なども入っていただき、第3番目に長崎大学が重点的に取り組む研究として打ち出そうということまで動いています。

※COE：日本の大学に世界最高水準の研究教育拠点を創り、研究の向上や創造的人材育成を図るための支援を行いながら、個性輝く大学作りを推進するプログラム。



司会・進行
原田 哲夫
Harada Tetsuo
 工学部教授
 広報誌企画・編集専門部長



■学部間の融合と総合力の発揮

福地 それはすばらしいですね。その勢いでこれからも続けてほしいですね。しかし、その時に「総合力」というものを同時に発揮していただきたい。長崎大学の一番の弱みは「学部あって大学無し」ですよ。学部は個性は強いんです。伝統も十分にありますが、しかし、現代は学部の個性を維持しながら、総合大学としての経営をしていかないといいけないのです。私はいつも思うのですが、縦割りの組織がたくさん出てくると隣が何をしているのかわからない。縦割りの組織は縦の風はよく通すけれど、横の風はなかなか入りません。窓を開けてあげないといけません。いかに窓を開けるかが組織の運営上の難しさなんです。もう一つの重要な点は「透明性」です。大学で何が行われているか外から見ると全然判らないようではいけませんね。

原田 なるほど。これまでの大学はどちらかというと縦割りで、学部の個性と一言いながら自分の城を守りたいという、妙な確執があつたように思います。理屈で分かっている、なかなか横とつながろうとしないところがありましたよね。

福地 横風を入れることについて、具体的な例があります。昨年、私は2回愛知万博に行つて来たのですが、そこで一番驚いたのは、水槽の中で金魚と鯛と一緒に泳いでいる姿でした。考えられないじゃないですか。

金魚は淡水魚で鯛は海水でしか生きられないのですから。その技術は要するにナノ技術と生物学のドッキングなんです。生物学だけ極めても、淡水魚を海水の中で泳がせるという発想は絶対に出てきません。

原田 それはおもしろい話ですね。

学長 違う技術をドッキングさせてできた新しい技術のお話を聞いて、私がこれまで考えたのは、学部間の「融合」についてです。学部によっては違う学部同士の「融合」についてもすごく受け止め方が違ってきます。他と融合することに対してものすごく腰が引けていて、「そこと一緒にかかるとうちは飲み込まれるんじゃないか」と考える部局もあるくらいです。それで考えたのが、大学院で一緒になろうじゃないかということだったんです。それで最初に創つたのが感染症の大学院だったんです。

今度、東シナ海の問題で再度、大学院で融合させたいと考えています。取り分け「アジアンスタンダード」という言葉は、大学院G Pの

打合せの時に松岡理事から出た言葉で、「それはどういう意味ですか？」と聞いたら、「韓国も中国も日本も東シナ海に面している国で、我々はみんなあの海の魚を食べている。さらにアジアモンスーンという同じ気候帯と、大きな川や大陸棚がある土地に住んでいる。急激な経済発展と人口の集中という点も共通している。だから海洋の研究をする時には、欧米のいわゆる『グローバルスタンダード』とは違った『アジアンスタンダード』が生まれてくる」ということなんです。そうすると、経済学部がすぐに話にのつてきて、そう、同じ企業の会計のやり方でもアジアのスタンダードというものがあるはずだから一緒に研究をやろうと。私の戦略としては大学院で文系・理系が融合し、長崎大学にしかできないものをどんどん始めようと思つているんですよ。



福地 茂雄 アサヒビール株式会社
 代表取締役会長

昭和9年生まれ。昭和32年長崎大学経済学部卒業後、同年アサヒビール株式会社入社。営業部長、大阪支社長等を経て、平成11年1月代表取締役社長に就任。平成14年1月から現職。

長崎大学だからこそ、 アジアを見据えて 新しい大学の創造を進めたい。



福地 「アジアンスタンダード」ってものすごく良いと思いますよ。私はいつも言うんですが、やはり、19世紀はヨーロッパの時代で、20世紀は北米の時代だったんですね。21世紀はアジアの時代だと言いますよね。そうだとすれば「アジアンスタンダード」があつていい。ただそれは世界のスタンダードと逆方向のものであつてはいけませんね。いろいろなスタンダードは最終的には互いの文化理解のことですから。

原田 先程から「総合力」や「融合」ということが挙げられていますが、文系学部が比較的少ない長崎大学では、今後、このような問題をどのような形で解決するかが問題ですね。

学長 文化を理解しない理系の研究者はもう研究者ではないんですね。各国の歴史や古くからそこに住んでいる人間の考え方について理解しなければ共通の認識というものは生まれない。長崎大学には確かに法学部や文学部などはありませんが、長崎大学の千人の教員の中には、経済学部や法学部、文学部など文系学部出身の教員も決して少なくありません。だから我々教職員全員がそのことを考えて、歴史、文化、あるいは人々の考え方に関心を持つことは重要なのです。そうすれば学生ともお互いにコミュニケーションできると思います。例えば、経済学部の学生の講義に水産学部や工学部の教員が担当する部分を作れば、より実践的エコノミストが育つと思いますよ。

開かれた大学を目指して

学長 私は、大学における大切な勉強の場の一つは図書館だと思っています。ただ長崎大学では学生の図書が充実していないことが欠点の一つだと思います。医学部と経済学部は昔から、学部の図書室があつて、図書も充実しているのですが、文教キャンパスは昭和24年できて以来、いろいろな学部が集合してきますから、学生に対する専門分野の図書が非常に少ないのが現状です。その点は今後の課題として、まず図書館を充実させるために行ったのが利用時間を18時から21時45分まで延ばしたことです。そうしたら、さっそく学生から「うれしい」という声が返ってきましたよ。

福地 学生の活字離れが進んでいる現状ですから、やはり図書館の充実は重要ですね。



図書を自分で買うとなると、読んでみないといい本か悪い本か分からないですよ。私は図書館に行ったら片っ端から新刊ばかりを借りていくんですよ。そしておもしろい本があれば、それがきっかけでその作家や内容に没頭していくというわけです。

学長 学生も会長のようにもつと本に親しんでもらえたら良いのですが。日曜日も開館し、一般の市民の方にも図書館を公開しています。もつともつとPRして市民の方にもたくさん来ていただければ、学生の支援にもなります。

福地 市民の方に「学生の態度が良い」とか、「あの大学のキャンパスはいつ行っても明るくて楽しい」「守衛さんが優しい」などと思ってもらえると、そういう事も一つの「学風」になりますからね。

学長 そうなんです。もつと市民の方にも大学に親しんでもらいたいと考え、私は去年から教育学部の学生と教員に頼んで学生プラザで「ランチタイムコナサート」を始めました。すると、だんだん来聴する学生が増えてきて、今やその事を聞きつけて近所の方まで来てくたさるようになりました。市民の方が学内に入りやすいようにして、学生と一緒にできることから始めていこうと思つています。学生の美術作品を構内に飾る事も始めたんですよ。



「長崎大学に誇りを持つこと」 長崎大学を創る全ての皆さんに 一番抱いてほしい言葉です。

■ ■ ■ ■ ■ アンサンブルヒーロー (縁の下の力持ち)

原田 私は初めて福地会長にお会いして、個人的にお聞きしたいことがございます。「スーパードライ」についてです。それなりのサクセスストーリーがあると思うのです。いろんなものが組み合わさって、それができあがったと思います。例えば、人材教育ですとか、環境のあり方とか、戦略的なものとか何でもよろしいのですが、差し障りのない程度にお話ししていただけないでしょうか。

福地 いやその話はやめましょう。それはもう1900年代の話だから。今はもう成功体験というものは役に立たないんですよ(笑)。それは、当時と今の生活、経済、いろいろな環境が全然違うから。その時の一つの事象だけを取り出して成功体験としてその通りにしてもうまくいきませんから。

ただ、物事が成るようになるためには、多くのアンサンブルヒーロー(unsung hero)が必要なんです。日本人はどうしてもヒーローやヒロインを作りたいがるんです。これはあの人がやったという風にね。アメリカンフットボールでもそうですが、タッチダウンをするときには、中央突破をするときにはオフエンスタックルが相手のディフェンスタックルを倒す、そして初めてクォーターバックが前に進めるわけですよ。だからタッチダウンができる。そこにはアン



サンブルヒーローがたくさんいるわけですよ

ね。私は長崎で毎年、高校に話をしに行くんですが、その時に若者に言うんだけど、「皆さんはヒーローになりたいかもしれないが、縁の下の力持ちになることも大事だ」と。また、一方では「時を告げる経営者よりも、時を作る経営者がいい」と言う言葉があります。それは一つの経営のシステムをつくる人物のことで、つまり、その人が死んでも社長を辞めても組織がそのシステムを回していけるということなんです。

■ ■ ■ ■ ■ 長崎大学に誇りを持つ

原田 最後に長崎大学へメッセージをお願いします。

福地 今大事なのは長崎大学の教職員と学生が、自分の大学がすばらしいと誇りを持つことですね。誇りはものすごく大事じゃないですか。だから、教授陣には研究と

いた伝統があるからだと思います。

学長 そうですよ。私はいつも入学式と卒業式では言うんですよ、大学は教職員と学生と卒業生この三つで作られると。そういう形でみんなが参加して作った大学を卒業すると誇りがもてるし、そこにアイデンティティーができるんです。

福地 そうそうそう。だからまず、校歌を歌うとかね。

学長 いいですね。それが一つの誇りにもなりますからね。

原田 今回の対談では、法人化3年目を迎える長崎大学に対して、会長からいろいろなる例を交えながら、貴重なアドバイスや我々教職員・学生に向けたエールをいただきました。長崎大学をとり巻く環境を見据え、いかにして大学の個性を生かした取り組みを行うかが今後の鍵と言えそうです。今日は長時間、大変参考になるお話をありがとうございました。